



No.206

ティークレイク

Tea Break

走馬灯の中身

会員 正林 真之

子どもが成長すると、自分の同じころを思い出しては比べる。そして、ついつい「俺が高校生だった頃は…」と、口にしたくなる。そうした思いをするたびに、自分は年をとったなとも思う。年齢を自覚する。すると、いつのまにか、思い出の一シーンごとに、「もう、あのころの親父と同年なんだ」とか、「あの時のお袋よりも年上なんだよなあ」と、そんなふうに思ったりする。

ここで、子どもというのは、親の気持ちは分からない。例えば、集合写真で他の子どものことに言及したりすると、「自分よりも他の子にばかり目が行ってえ！」と怒る。ちょっと悲しくもある。けれども、親になってみれば分かる。集合写真など、自分の子ども以外など、本当にどうでもよいのだ。まず、自分の子どものことしか目に入らない。そんなものである。

そうして、自分の子ども以外を見る余裕ができてくると、ついつい口に出す。けれども、自分の子どもしか見ていないことなど当たり前すぎて、また、あえて口に出すというのも何か気恥ずかしい気がするの、あえて口に出さないだけである。けれども、当の子どもには、そんなことなど分からない。それが分かるのは、自分が自ら親になったときだけなのである。

そう、親の愛情や親との思い出というものは、自分が年をとるにつれて、常に後からついてくるものである。それを我々は、人生の年月の流れの中で、拾っていく。

実は、それは特許事務所の経営でも同じことがあったりする。まだ従業員であるうちは、いくら頑張っても、所長の本当に気持ちは分からない。けれども、所長になってみて、当時と同じくらいの規模になったときには特に、そのときの所長の気持ちや苦労というものが分かるものなのだ。

ただ親と違うのは、「ああ、あのときは、こうだったんですね」と気軽に談笑できることばかりではないということである。これは特に、世話になったものであればあるものほど、かえって気恥ずかしくて言えなかったりするものなのだ。

ところで、漫画「サザエさん」に登場してくるマスオさんは確か28才であったと思う。これは実は、私が弁理士になった年齢である。そして今の私は、「サザエさん」の波平（確か54才）よりも二つ年上である。マスオさんの年から波平の年齢になるまで弁理士業をしていたことになる。

これが昭和の時代であったならば、28才のマスオさんと54才の波平が同じ時間に同じ電車に乗って通勤し、同じような仕事をしていただけであるが、何かと激動の現在であれば、そんなわけにはいかない。実際、私が28才のころと今とでは、仕事環境も社会情勢も激変している。特に昨今のコロナ騒動によって、労働環境はすっかり変わってしまった。なので、新人弁理士に対して、「僕が新人の頃は…」などと言っても、時代遅れだと馬鹿にされるのがオチだろう。

とはいえ、それでもあえて言わせてもらえば、自分がマスオさんと同じ年の頃は、そしてそれから暫くの間は、健康のことなどどうでもよかった。とにかく仕事。これだけだった。この時期は、医者 of 言うことを最も聞かなかった時代だったと思うし、怖いものなど無かったようにも思う。けれども、年をとるにしたがって世の中の怖さを知り、医者 of 言うことも馬鹿にしなくなった。人間ドックの予約を勝手にキャンセルすることもなくなっていった。

ところで、人生において、よく使われるのが「折り返し点」という言葉である。最も話題に上るようであり、それでもあえて無視されて過ごしているのが「自分の人生の中間地点」ということだろう。「今までの時間」と「これからの時間」が推し量られるのである。そうして、自分の娘が高校を卒業した時点で、以前の家族（自分の親兄弟）と過ごした時間と今の家族（自分の妻子）との思い出期間が同じくらいになったことに気付く。おそらく、というか、ほぼ確実に、この時点で既に、自分の人生の折り返し地点は過ぎてしまっていることだろう。

では、人間というのは、いざ死に直面したときに何を思うのか。戦争映画などに出てくる戦死のシーンで、青年が「おかあさん！」と叫びながら死んでいく様を見

て、人間というのは死ぬ間際には両親のこと、特に母親のことを思うものだと以前は思っていた。けれども、今になってみれば、自分の親兄弟と妻子で、過ごした時間が同じくらいであるにもかかわらず、どちらのほうを選ぶのか、その勝敗は既についてしまっている。本当に良くしてくれた親兄弟には誠に申し訳ないことなのであるが、どちらが優先されるのかは考えるまでもない。とすれば逆に、この私から今、「考えるまでもない」と切り捨てられた方の思い出のほうが、母にとっては何よりも重要な思い出だったはずなのである。

母の享年まであと2年となった今の年になってみれば、死ぬ間際に母が思ったのが何であったのか、手に取るようにわかる。